

しゃいました。この言葉を使いますと、日本以外のアジア太平洋のどの地域でも彼らが歌った新しい歌というのは讃美歌のことだったけれど、日本人が歌った新しい歌には、讃美歌の他にも唱歌があった。

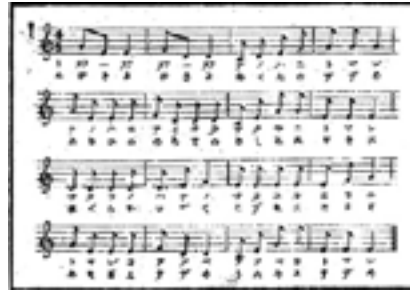
上手いこと言いますね。そうなんです。それくらい讃美歌のインパクトは強烈だったようです。もう讃美歌しか歌わなくなったと言ってもいいくらいじゃないでしょうか。

§6 インターデイシプリン

——ここまでお話をお聞きしてちょっと気になってきたことがあるのですが。先生が今なさっている研究は分野で言いますと何になるのでしょうか。音楽史のようですが、それとも少し違うような気がしますし、音楽教育史の範囲からはみ出してしまうようですが。

そうですね、音楽史と言えば日本ではまず西洋音楽史ですね。それから日本の音楽史とか東洋音楽史はありますが、でも私が今研究している太平洋の讃美歌の歴史研究というのは、まだ存在していません。それにこれまでの音楽史では扱いませんね。この地域の音楽を対象に研究しているのは民族音楽研究ですね。それについて面白い話があります。

実は昭和九年に、ミクロネシアの民族音楽を調査した学者がいました。彼がミク



唱歌「蝶々」(『小学唱歌集 初編』1882年第17)の楽譜

出典：文部省音楽取調掛編『小学唱歌集 初編』(文部省、1881年) / 国立国会図書館所蔵

ロシアの島々に行った時、どこに行っても聞こえてくるのは讚美歌ばかりだったのです。でもそれは彼の研究対象ではないわけです。彼にとっては讚美歌というのは自分が知りたい音楽、つまりミクロネシアの島々に昔からあった音楽、すなわち讚美歌が伝わる前にあった音楽を消してしまうものだったのです。ですから、自分の研究の邪魔になる音楽、恐らくそんなふうにしたでしょうね。少なくとも彼の研究対象にはなっていません。

ですから私のやっている研究は民族音楽の研究でもないわけです。そのように言うことはあまり好きではありませんが、新しい研究と言っしかないかもしれません。あるいはインターディシプリン (interdiscipline) という言葉があるんですが、実際的と訳しますが、ディシプリンというのは学問の領域のことです。インターはインターナショナルとかのインターですね。かみ砕いて言えば、学問の垣根を越えた学問、学問の垣根をまたぐ学問、ということですね。私の研究は、音楽を対象とする様々な研究の垣根を越えた研究、そんな風にしか言えないのではないのでしょうか。

§7 「蝶々」の場合

―なるほど、学問の垣根を越えた新しい音楽研究ということですね。

でもあまりそのことは強調しないようにしています。教育大学にいる研究者です